

---

# 生きる

ポイ宇宙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生きる

### 【Zマーク】

Z2016C

### 【作者名】

ポイ宇宙

### 【あらすじ】

暗闇で生きる者の話です、文字数が少なくあらすじを書くと内容がモロバレになってしまないので、書くことがありません。とりあえず、前書きにも書いているのですが、ぜひぜひ読んでください。

## (前書き)

書く」とはありますん、読んでくださいーーー！

僕は生まれて以来ずっとこの場所で生きている。太陽の光が全くささず、暗くて狭い迷路に。

今ではすっかり、迷路の道順も覚えどこをどう行けばいいのかわからなくなっていた。だが、どうしても出口が見つからない、外に出る道が見つからないのだ。

しかし、それ以外何の不便もない。食べ物は豊富だし、水もたくさんある。家族もいる。僕は8人兄弟の2番目だ。兄弟は色々な事情で別れて行き、今は兄と二人で生活をしている。ただ、僕たちは呼び合つときには兄、弟と呼び合っている。名前がないのだ、僕たちは。まあ、今となつては名前があるうが無からうが関係ない、無くても生きていけるのだから。

「弟、腹が減ったな」

兄が言った。確かに今日はまだ食事をしていなかつた。そこで、僕と兄はいつもの食料がある場所に向かつた。そこは、行けばすぐに食べ物が見つかる楽園だ。

「兄。今日はいつもより水の勢いが激しいね」

楽園に向かうまでに川があるのだ、そこに橋がかかつていてそこを渡らなければならぬのだが、今日は雨の影響か、いつもより水の流れが激しかつた。橋も濡れていて滑りそうだ。

「やめたほうがいいと思うよ兄、今日は別の所に行こう」  
と僕は兄に言った。しかし、楽園はもう目の前で橋を渡ればすぐなのだ。兄は僕の声に耳を貸さずに前に出た。

「大丈夫だ、こんなもの昔に比べたら軽いものだ」  
僕の制止を払いのけ兄はさらに橋へと足を出した。

そして、兄は楽園への橋の上に乗つた。橋は濡れていなければ簡単に渡れるものなのだが、今日は渡れるとは思えなかつた。  
しかし、兄は渡ろうとした。

「ほほほ、どうした弟、来ないのか俺が全部食べてしまつた。

兄は少しずつであるが橋を渡つて行つた。さすがは兄。

「よし、もう少しだ

兄はもう少しど油断をして緊張の糸を切つてしまつた。

集中が切れ兄の体はバランスを失い、ツルツと滑つてしまつた。

「兄！」

「うわあああ

兄は仰向けの状態で激流の川へと落ちて行つた。助かると思えないほどの水が兄を襲つた。兄は何度か顔を出したりしていたがやがて浮かんでこなくなつた。今頃兄の死体は下流のほうへと流れているだろう。

はあ、また兄弟が死んでしまつた。もう僕しか生きていない。さて、どうするか。とりあえず僕は尻尾を丸めて、ヒゲをピクピクと動かした。

以上。下水道の中で暮すドブネズミの生活でした。

(後書き)

ふと、思いついたので書きました、ぜひ感想を聞かせてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2016c/>

---

生きる

2010年10月11日14時10分発行